

## トロイの遺跡発見とシュリーマン トルコ

トロイの遺跡を訪れた。陽の傾いた公園の小道を辿りながら遙か遠くに巨大な木馬が見えてくる。唐突に随分以前に見た映画の題名が頭に浮かんだ。「トロイのヘレン」である。

1956年公開のトロイ戦争を舞台にした映画で、主演女優はロッサナ・ポDESTaで、絶世の美女ヘレンを演じていた。すでに半世紀以上前のことゆえ映画の題名とロッサナ・ポDESTaがまことに美しかったこと以外ストーリーは思い出せない。そうこうしているうちに小高い石垣が重なる遺跡らしき場所にやってきた。

乱雑にほじくり返したような様相である。ここがギリシャの詩人ホメロスのイリアスに出てくるトロイの遺跡なのだ。石くれの山に気をとられ、まるで工事現場を案内されているような気分である。



さてトロイは海岸近くのはずだが海はどこかとガイドに尋ねると、長い年月の間に川が運んできた土砂で埋まり、今では海岸線は2 kmほど先にあると答えが返ってきた。

ちょっと見のトロイの遺跡は石くれの大きなくぼみにしかみえない。ガイドの話では時代の変遷と共に遺跡が積み重なっているが、このくぼみからシュリーマンはプリアモスの宝物と呼ばれる

黄金の数々を発見した。ここは考古学上重要な遺跡なのでよく見てくれと言うが、くぼみを見つめガイドの説明を聞いてもイメージが膨らまず何がどうなっているのかよくは判らなかつた。

ハインリッヒ・シュリーマン(1822年～1890年)は、ドイツ生まれの実業家で考古学者である。語学は独特の方法で頭に叩き込み15か国語を自由に操れた。成人してから手がけた商売はいずれも成功し巨万の富を築いていく。そして子供の頃から夢みたホメロスの叙事詩イリアスに謳われているトロイ遺跡発見に向けて歩みだしていく。

エーゲ海一帯は紀元前1200年ごろ青銅器文明が栄え、古代ギリシャ人が活動した舞台である。これをエーゲ文明と呼んでいる。その歴史はギリシャ神話として語りつないでいるようだが、近世に至るもギリシャ神話が史実と結びつくとは誰も考えていなかった。

シュリーマンの自伝によれば父はプロテスタントの牧師

で古代の歴史に大いに関心を持ち、時には古代ギリシャの詩人ホメロスのトロイ戦争などについて、わずか8歳の息子に語って聞かせたとある。三つ子の魂百までの例えのようにシュリーマンはホメロスの古代ギリシャの叙事詩「イリアス」で語られているトロイ戦争を架空の物語でなく真実



と信じ、いつか自分の手で発掘したいと幼子の時から情熱を燃やし続けたのである。そして誰も目を付けてないヒサルルクの丘こそイリアスに謳われているトロイに違いないと信じ自費で発掘に着手したのである。

シュリーマンは豊かでない子供時代を過ごし、成人してからも職を転々としたがロシアのサンクト



ここから財宝が発見された

ペテルブルグに商社を設立してからは、商才を遺憾なく発揮し財を築いていく。富豪となったシュリーマンは幼少期に強く心に思い描いたホメロスの詩は事実に基づくという信念を曲げることなくトロイの所在地を割り出し発掘に着手する。1871年秋に発掘を始め2年後の1873年に“プリアモスの財宝”と呼ばれる黄金の数々を探し当てた。シュリーマンはさらに1876年に現ギリシャのミケーネにおいて黄金の“アガメムノンのマスク”などを発見する幸運にも恵まれている。シュリーマンのトロイ遺跡の発見によって古代ギリシャ研究が盛んとなるも、一方考古学の視点からするとシュリーマンが乱雑に掘り進んだ結果遺跡を傷つけ考証が困難なことになるなどの批判もある。

シュリーマンは17歳のギリシャ女性ソフィアと再婚する。トロイから発掘されたプリアモスの財宝は第2次世界大戦時ドイツからロシアに持ち去られ現在はモスクワにある。



トロイの木馬

夏草と石くれだけで何の変哲無く見えるここトロイ遺跡は、考古学上は重要だが素人目にはよくわからないとツアー仲間はガイドの説明もそこそこに広場に置いてある巨大な木馬に関心を移し、一斉に木馬に駆け上がり高い窓から顔を覗かせ記念撮影に興じた。

余談ではあるがシュリーマンは遺跡発掘のみならず世界各地を旅している。徳川幕府が倒れ、日本の夜明けともいふべき明治維新初期に来日している。旅行記は翻訳され「シュリーマン旅行記清国・日本」石井和子訳で講談社学術文庫から出版されている。日本が200年に渡る鎖国から日米和親条約により開港したのは1854年である。それからわずか10

年後の1865年日本の世情がまだ落ち着いてない時に、外国人にとっては身に危険が及ぶような時代に清国（現中国）を經由して日本を訪れ横浜・八王子・江戸を巡っている。シュリーマンは清国と比べながら日本の文化を称賛している。それは当時の日本を垣間見る興味深い旅行記である。2023年金相場が高騰している。黄金は古代から現代に至るも人間を引き付けてやまない。ツタンカーメンの黄金のマスク、アレキサンダー大王の父フィリッポス2世の地下墓地にあるきらびやかな黄金の装飾品、ペルーの天野黄金博物館に展示してあるインカの金細工の数々、イスタンブール・トプカピ宮殿に展示してあるスルタンの財宝など、一方日本はといえばマルコ・ポーロの旅行記には屋根を2cmの黄金で葺いたとあるがこれは事実でない伝聞であり、博物館に収まっているのは志賀島から偶然発見された邪馬台国の金印ぐらいいし思い浮かばない。モスクワにあるシュリ

ーマンの黄金の今の価値は一体どのくらいと、つい下世話なところへ思考が向いていく。